富良野 笑顔で巣立ち

伊藤なづなさん(18) 相馬出身

東京電力福島第1原発事故の発生を受け、相馬市から北海道富良野市に避難し、生活を続けてきた伊藤なづなさん(18)が、東京の大学への進学に伴い、母由紀さんと共に14年暮らした北海道を離れる。「北海道で、一生の友人ができた。富良野が大好きになった」というなづなさんは笑顔で巣立ちの日を迎える。

【1面に本記】

東日本大震災と原発事故の発生時、なづなさんは4歳。相馬市で絵画教室にいる途中だった。なづなさんと2人暮らしの由紀さんは、新聞に掲載された脚本家倉本聰さん発案の避難者受け入れの記事を見て、富良野に移ることを決めた。到着した日には、家に倉本さんが訪れ、2人を励ました。

なづなさんは相馬に残った祖母に懐いていたため寂しい思いをしたこともあったが、小学2年生で入った地元の芸術活動のグループで、多くの人に温かく迎え入れられたこともあり、徐々に富良野になじんでいった。

芸術活動に力を入れる市外の学校に進学。ニットなどを編み上げるテキスタイルを学びたいという思いが強まり、芸術分野の難関として知られる多摩美大(東京)の受験を決意し、最初の受験で合格を勝ち取った。

雪に覆われた木々を見上げるなづなさん㊨と由紀さん

震災14年

大好きな地 育んだ芸術の夢

なづなさんと由紀さんは8日、進学を報告するため倉本さんのアトリエを訪れ、避難初日に3人で撮影した写真に見入った。「こんなに大きくなったんだね」と写真に見入る倉本さんから、これから芸術活動を目指す際のキーワードとして「美は利害関係があってはならない」との言葉を送られ、なづなさんは表情を引き締めた。

富良野に来たことで将来の夢を見つけることができたというなづなさんの憧れの人は、母である由紀さんだ。「高校で富良野を一度離れて勉強させてもらうなど苦労をかけた。いつかママに恩返しがしたい」。発言は由紀さんが少し席を外したタイミング。「記事が載るまでお母さんは気付かないね」と声をかけると、なづなさんはいたずらっぽく笑った。(小泉篤史)

富良野市に到着した際、(右から)なづなさんと由紀さんを訪ねた倉本さん=2011年4月

▲ 3月9日 福島民友新聞掲載

※関連記事を別シートで発信しています

どのようなことがきっかけで、伊藤なづなさんとお母さんが富良野への避難を決めたのですか？

富良野は、なづなさんにとって、どのような存在ですか？

関連記事を参考に、なづなさん達を含め、避難する親子を受け入れてきた倉本聰さんの思いについて、あなたの考えをまとめてみましょう！

「ジュニア窓」にとうこうしよう　福島民友投稿のページ「窓」に送る